

絵本の春

泉鏡花

青空文庫

もとの邸町やしきまちの、荒果てた土塀が今もそのままになっている。

……雪が消えて、まだ間もない、乾いたばかりの——山国で——
 石のごつごつした狭い小路が、霞みながら一ひとすじ条煙のように、ぼ
 っと黄昏たそがれて行く。

弥生やよいの末から、ちつとずつの遅速はあつても、花は一いつとき時に咲
 くので、その一ならびの塀の内に、桃、紅梅、椿つばきも桜も、あるい
 は満開に、あるいは初々しい花に、色香を装っている。石垣の草
 には、蒨ふきの臺とうも萌もえていよう。特に桃の花を真まつ先さきに挙げたのは、
 むかしこの一廓は桃の組といった組屋敷だった、と聞くからであ
 る。その樹の名木も、まだそつちこちに残っていて麗うららかにに咲いたの

が……こう目に見えるようで、それがまたいかにも寂しい。

二条ばかりも重^{かさな}つて、美しい婦^{おんな}の虐^なげられた——旧藩の頃には

どこでもあり来^{きた}りだが——伝説があるからで。

通^{とお}道^{みち}というでもなし、花はこの近^{きん}処^{じよ}に名所さえあるから、

わざとこんな裏小路を捜^{さが}るものはない。日中^{ひなか}もほとんど人通りは

ない。妙^{としごろ}齡^ろの娘でも見えようものなら、白昼といえども、それ

は崩れた土塀から影を顕^{あら}わしたと、人を驚かすであろう。

その癖、妙な事は、いま頃の日の暮方は、その名所の山へ、絡^ら

繹^{くえき}として、花見、遊山に出掛けるのが、この前通りの、優しい

大川の小橋を渡つて、ぞろぞろと帰つて来る、男は膚脱^{はだぬ}ぎになつ

て、手をぐたりとのめり、女^{なまめ}が媚^めかしい友^{ゆう}染^{ぜん}の棲^{つま}端^{ばし}折^{より}で、脚^く

楊枝わえようじをした 酔よっぱらい 払らい まじりの、浮かれ浮かれた人数が、前後に
 揃そろつて、この小路をぞろぞろ通るように思われる……まだその上
 に、小橋を渡る 躑あしおと 音が、左右の土塀へ、そこを踏ふむように、と
 ろとろと響いて、しかもそれが手に取るように聞こえるのである。
 ——このお話をすると、いまでも私は、まざまざとその景色が
 目に浮ぶ。——

ところで、いま言った古小路は、私の家から十町余りも離れて
 いて、縁ながで視ながめても、二階から伸上つても、それに……地方の事
 だから、板葺いたぶき 屋根へ上みまわつて、しても、実は 建たてつらな 連な った賑にぎやかな町
ちや 家に隔なてられて、その方角には、橋はもとよりの事、川の流ながれも見
 えないし、小路などは、たとい見えても、松杉の立木一本にもか

くれてしまう。……第一見えそうな位置でもないのに——いま言
つた黄昏たそがれになる頃は、いつも、窓にも縁にも一杯の、川向うの山
ばかりか、我が家の町も、門かども、欄干てすりも、襖ふすまも、居る畳も、ああ
ああ我が影も、朦朧もうろうと見えなくなつて、國中、町中にただ一ひとす
条じ、その桃の古小路ばかりが、漫々として波しずかの静そうかいな蒼海そうかいに、
船脚せんきゃくを曳ひいたように見える。見えつつ、面白おもしろそうな花見がえりが、
ぞろぞろ橋を渡る蹠音しやくおんが、約束通り、とととどど、ごろごろ
と、且つ乱れてそこへ響く。……幽かすかに人声——女らしいのも、ほ
ほほ、と聞こえると、緋桃ひももがぱつと色に乱れて、夕暮の桜もはら
はらと散りかかる。……

直接に、そぞろにそこへ行き、小路へ入ると、寂しがって、気味を悪がって、誰も通らぬ、更に人影はないのであった。

気勢はしつつ、……橋を渡る音も、隔って、聞こえはしない。

……

桃も桜も、真紅な椿も、濃い霞に包まれた、朧も暗いほどの土

塀の一处に、石垣を攀上るかよしのぼと附着くつついて、……つつじ、藤

にはまだ早い、——荒庭の中を覗のぞいている——緋かすりの筒袖を着た、頭の円い小柄な小僧の十余りなのがぼつんと見える。

そいつは、……私だ。

夢中でぽかんとしているから、もう、とつぷり日が暮れて塀越

の花の梢こぎすえに、朧おぼろづき月のやや斜ななめなのが、湯上りのように、薄くほんのりとして覗のぞくのも、そいつは知らないらしい。

ちようど吹倒れた雨戸を一枚、拾つて立掛けたような破れた木戸が、裂きれめだらけに閉とぎしてある。そこを覗のぞいているのだが、枝ごし葉ごしの月が、ぼうとなどった白紙しらかみで、木戸の肩に、「貸本」と、かなで染めた、それがほのかに読まれる——紙が樹くまの隈くまを分けた月の影なら、字もただ花つぼみと荳つぼみを持った、桃ひとえだの一枝ひとえだであろうも知れないのである。

そこへ……小路の奥の、森おおの覆おおつた中から、葉をざわざわと鳴らすばかり、脊かえりの高い、色の真まっしろ白しろな、大柄おんなな婦おんなが、横町の湯かえりの帰途かえりと見える、……化粧道具と、手拭てぬぐいを絞しぼつたのを手にして、

陽気はこれだし、のぼせもした、……微醉ほろよいもそのまま、ふらふらと花をみまわしつつ近づいた。

巢みみずくから落ちた木菟ひよの雛ひよツ子のような小僧こぞうに対して、一種の大なる化鳥けちようである。大女の、わけて櫛くしまき巻まきに無雑作むじやくに引束ひつたばねた黒髪くろかみの房々とした濡色ぬしきと、色の白さは目覚しい。

「おやおや……新坊。」

小僧はやつぱり夢中でいた。

「おい、新坊。」

と、手拭てぬぐいで頬ほっぺた辺あたを、つるりと撫なでる。

「あッ。」

と、肝かんを消して、

「まあ、小母さん。」

ベソを搔かいて、顔を見て、

「御免なさい。御免なさい。父おとつさんに言つては可い厭やだよ。」

と、あわれみを乞こいつつ言つた。

不気味すごに凄こい、魔の小路だというのに、婦おんなが一人で、湯歸りの捷ちかみち徑あやしを怪いけなんでは不可いい。……実はこの小母さんだから通つたのである。

つい、(乙)の字なりに畝うねつた小路の、大川へ出口の小さな二階家に、独身で住すまつて、門かどに周易の看板を出している、小母さんが既に魔に近い。婦おんなで卜筮うらないをするのが怪しいのではない。小僧は、もの心ついた四つ五つ時分から、親たちに聞いて知つている。大

女の小母さんは、娘の時に一度死んで、通夜の三日の真夜中に蘇よ
みがえ生みつた。その時分から酒を飲んだから酔うたつて転た寝ねでもした気
 でいたろう。力はあるし、棺かん桶おけをめりめりと鳴らした。それが
 高島田だったというからなけ稀ぶ有である。地獄も見て来たよ——
 極楽は、お手のものだ、とトう筈らごないときはた掌なごころである。且つ寺子屋仕
 込みで、本が読める。五経、文もん選ぜんすらすらで、書よがまた好よい。
 一度冥途めいどをさまよをさまよつてからは、仏教したしに親したしんで参禅したしもしたと聞きく。——
 小母さんは寺子屋時代から、小僧の父親とは手て習な傍ら輩ばいで、
 そう毎々でもないが、時々は往ゆ来きをする。何その用で、小僧も使
 いに遣やられて、煎餅せんべいも貰もらえば、小母さんの易ゆをト《み》る七星
 を刺し繡ゆうした黒い幕を張はつた部屋も知しっている、その往ゆ戻もどりか

ら、フトこのかくれた小路をも覚えたのであつた。

この魔のような小母さんが、出口に控えているから、怪い可あやしおそろ

恐おそいものが顕あらわれようとも、それが、小母さんのお夥なかま間の気が

するため、何となく心こころ易やすくつて、いつの間にか、小児こどもの癖

に、場所柄を、さして憚はばからないでいたのである。が、学校をなま

けて、不思議な木戸に、「かしほん」の庭を覗くのを、父親の傍

輩に見つかったのは、天狗てんぐに逢あつたほど可恐おそしい。

「内へお寄り。……さあ、一緒に。」

優しく背せなを押したのだけれども、小僧には襟首つまを抓つかんで引立て

られる気がして、手足をすくめて、宙あを歩ある行いた。

「肥ふとつていても、湯ゆぎめがするよ。——もう春はるだがなあ、夜はま

だ寒い。」

と、納戸で被布ひふを着て、朱の長煙管ながぎせるを片手に、

「新坊、——あんな処に、一人で何をしていた？……小母さんが易を立てて見てあげよう。二階へおいで。」

月、星を左右の幕に、祭壇を背にして、詩経、史記、二十一史、十三経注ちゆうそ疏しゆなど本箱がずらりと並んだ、手習机を前に、ずしりと一杯に、座蒲団ざぶたんに坐すわつて、蔽おひのかかった火桶を引寄せ、顔を見て、ふとつた頬でニタニタと笑いながら、長閑のどかに煙草たばこを吸つたあとで、円い肘ひじを白くついて、あの天眼鏡というのを取つて、ぴたりと額に当てられた時は、小僧は悚然ぞつとして震ふる上あがつた。

大川の瀬がさつと聞こえて、片側町の、岸の松並木に風が渡つ

た。

「……かし本。——ろくでもない事を覚えて、此奴めが。こんな
 変な場処まで捜しまわるようでは、あすこ、ここ、町の本屋をあ
 ら方あらしたに違いない。道理こそ、お父さんとつが大層な心配だ。

……新坊、小母さんの膝ひざの傍そばへ。——気をはつきりとしないか。

ええ、あんな裏土堀の壊れ木戸に、かしほんの貼はり札ふだだ。……そ

んなものがあるものかよ。いまも現に、小母さんが、おや、新坊、

何をしている、としばらく熟じつと視みていたが、そんなはり紙は気けも

影もなかつたよ。——何だとえ？……昼間来て見ると何にもない。

……日の暮から、夜へ掛けてよく見えると。——それ、それ、そ

れ見な、これ、新坊。坊が立っていた、あの土堀の中は、もう家うち

が壊れて草ばかりだ、誰も居ないんだ。荒庭に古い祠ほこらが一つだけ残っている……」

と言いかけて、ふと独ひとりで頷うなずいた。

「こいつ、学校で、勉強盛りに、親がわるいと言うのを聞かずに、夢中になって、余り凝るから魔まが魅ました。ある事だ。……枝の形、草の影でも、かし本の字に見える。新坊や、可こ恐わい処こだ、あすこは可こ恐わい処こだよ。——聞きな。——おそろしくなつて帰れなかつたら、可よい、可よい、可よい、小母さんが、町の坂まで、この川土手を送つてやろう。

——旧藩の頃にな、あの組屋敷に、忠義がった侍が居てな、御主人の難病は、巳み巳み巳み巳み、巳みの年月の揃つた若い女の生いき肝ぎで治も

ると言つて、——よくある事さ。いずれ、主人の方から、内証で入費は出たろうが、金子かねにあかして、その頃の事だから、人買の手から、その年月の揃つたという若い女を手に入れた。あろう事か、まないた俎はなかるうよ。雨戸に、その女を赤裸はだかで鋸のこで打つたとな。……これこれ、まあ、聞きな。……真白まっしろな腹をずぶずぶと刺いて開いた……待ちな、あの木戸に立掛けた戸は、その雨戸かも知れないよ。」

「う、う、う。」

小僧は息を引くのであつた。

「酷むじたらしい話をするとお思いでない。——聞きな。さてとよ……生肝を取つて、壺つぼに入れて、組屋敷の陪臣ばいしんは、行水うがい、嗽うがいに、

身を潔め、麻上下で、主人の邸へ持つて行く。お傍医師が心得て、……これだけの薬だもの、念のため、生肝を、生のもので見せてからと、御前で壺を開けるとな。……血肝と思つた真赤なのが、糠袋よ、なあ。麝香入の匂袋でもある事か——坊は知るまい、女の膚身を湯で磨く……気取つたのは驚のふんが入る、糠袋が、それでも、殊勝に、思わせぶりに、びしよびしよぶよぶよと濡れて出た。いずれ、身勝手な——病のために、女の生肝を取ろうとするような殿様だもの……またものは、帰つて、腹を割いた婦の死体をあらためる隙もなしに、やあ、血みどれになつて、まだ動いています、とおのが手足を、ばたばたと遣りながら、お目通、庭前で斬られたのさ。

いまの祠ほこらは……だけれど、その以前からあつたというが、そのあとの邸だよ。もつとも、幾たびも代は替つた。

——余りな話と思おうけれど、昔ばかりではないのだよ。現に、小母さんが覺えた、……ここへおとし一昨年越して来た当座、——夏の、しらしらあけの事だ。——あの土塀の処に人だかりがあつて、がやがや騒ぐので行つてみた。若い男が倒れていてな、……川向うの新地歸りで、——小母さんもちよつと見知つている、ちとたりないほどの色男なんだ——それが……いしや医師もからだ駆附けて、しら身体をしら検べると、あんぐり開けた、口一杯に、もみ紅絹の糠袋……」

「……………」

「糠袋をほおば頬張つて、それが咽喉のどに詰つまつて、息が塞ふさつて死んだのだ。

どうやら手が届いて息を吹いたが。……あとで聞くと、月夜にこの小路へ入る、美しいお嬢さんの、湯帰りのあとをつけて、そして、何だよ、無理に、何、あの、何の真似だか知らないが、お嬢さんの舌をな。」

と、小母さんは白い顔して、ぺろりとその真紅まっかな舌。

小僧は太い白蛇に、頭から舐なめられた。

「その舌だと思ったのが、咽喉へつかえて気絶をしたんだ。……舌だと思ったのが、糠袋。」

とまた、ぺろりと見せた。

「厭いやだ、小母さん。」

「大丈夫、私がついているんだもの。」

「そうじゃない。……小母さん、僕もね、あすこで、きれいなお嬢さんに本を借りたの。」

「あ。」

と円い膝に、揉み込むばかり手を据えた。

「もう、見たかい。……ええ、高島田で、紫色の衣ものを着た、美しい、気高い……十八九の。……ああ、悪戯いたずらをするよ。」

と言った。小母さんは、そのおばけを、魔を、鬼を、——ああ、悪戯をするよ、と独言ひとりごとして、その時はじめて真顔になった。

私は今でも現うつながら不思議に思う。昼は見えない。逢魔おうまが時からは臍おぼろにもあらずして解わかる。が、夜の裏木戸は小児心こどもごころにも遠慮

される。……かし本の紙ばかり、三日五日続けて見て立つと、その美しいお嬢さんが、他所よそから帰ったらしく、背せなへ来て、手をとつて、荒れた寂しい庭を誘つて、その祠ほこらの扉を開けて、燈明の影に、絵で知つた鎧よろいびつのような一具の中から、一冊の草双紙を。

……

「——絵解えときをしてあげますか……（註。草双紙を、幼いものに見せて、母また姉などの、話して聞かせるのを絵解と言つた。）——読めますか、仮名ばかり。」

「はい、読めます。」

「いい、お見こね。」

きつね格子に、その半身、やがて、藤ろうたけた顔のぞが覗いて、見送

つて消えた。

その草双紙である。一冊は、夢中で我が家の、階はしご子段だんを、父に見せまいと、駆上る時に、——帰ったかと、声がかかつて、ハツと思う、……懐ふところ中に、どうしたか失うせて見えなくなつた。ただ、内へ帰るのを待兼ねて、大通りの露店の灯影ともしびに、歩ある行きながら、ちらちらと見た、絵と、かながきの処は、——ここで小母さんの話した、——後のでない、前の巳巳巳の話であつた。

私は今でも、不思議に思う。そして面影も、姿も、川も、たそがれに油を敷いたように目に映る。……

大正…年…月の中旬、大雨たいうの日の午うまの時頃から、その大川に洪水した。——水やわらかが軟に綺麗で、流ながれが優しく、瀬も荒れないというので、——昔の人の心であろう——名の上へ女をつけて呼んだ川には、不思議である。

明治七年七月七日、大雨の降続いたその七日七晩めに、町のもう一つの大河が可おそろし恐い洪水した。七の数が累かさなって、人死ひとじにも夥おびただ多だしかなかった。伝説じみるが事実である。が、その時さえこの川は、常とこなつ夏の花に紅べにの口を漱そそがせ、柳の影は黒髪を解かしたのであったに——

もっとも、話の中の川かわづつみ堤つみの松並木が、やがて柳になって、

町の目貫めぬきへ続く処に、木造の大橋があつたのを、この年、石に架かけかえた。工事七分という処で、橋杭はしぐいが鼻の穴のようになつたため水を驚かしたのであろうも知れない。

僥倖さいわいに、白昼の出水だつたから、男女に死人はない。二階家はそのまま、辛うじて凌しのいだが、平屋はほとんど濁流の瀬に洗われた。

若い時から、諸所を漂泊さすらつた果はてに、その頃、やつと落着いて、川の裏小路に二階借がりした小僧の叔母おばにあたる年寄としよりがある。

水の出盛つた二時半頃、裏向むきの二階の肱掛窓ひしかけまどを開けて、立ちもやらず、坐りもあえず、あの峰へ、と山に向つて、膝ひざを宙ひやに水を見ると、肱の下なる、廂屋根ひさしやねの屋根板は、鱗うろこのように戦おのいて、

——北国の習慣に、ならわし 圧におしのせた石の数々はわずかに水を出た磧かわらであつた。

つい目の前を、ああ、島田しまだまげ鬚げが流れる……緋鹿子ひがのこの切きれが解けて浮いて、トちらりと見たのは、一条ひとすじの真赤まっかな蛇。手箱ほど部かさなの重つた、表紙さいしきえに彩色さいしきえ絵の草紙くさしを巻いて——鼓の転がるように流れたのが、たちまち、紅べにしずくの雫しずくを挙げて、その並木の松の、就なかん中、山より高い、二三尺水を出た幹を、ひらひらと昇つて、声するばかり、水に咽むせんだ葉に隠れた。——瞬まひく間である。——

そこら、屋敷小路の、荒廃離落した低い崩土堀くずれどべいには、おおよそ何百年来、いかばかりの蛇が巣すくつていたろう。蝮まむしが多くて、水に浸つた軒々では、その害を被つたものが少くない。

高台の職人の屈くつきよう 竟きやうなのが、二人ずれ、翌日、水の引際を、
炎天の下に、大川添ぞいを見物して、流ながれの末一里有余あまり、海へ出て、暑
さに泳いだ豪傑がある。

荒海の磯いそ端はたで、肩を合わせて一息した時、息苦しいほど蒸暑
いのに、颯さあと風の通る音がして、思わず脊筋せきすぢも悚然ぞつとした。……
振り返ると、白浜一面、早や乾いた蒸氣いぎれの裡なかに、透すきなく打った細い
杭くいと見るばかり、幾百条とも知れない、おなじような蛇が、おな
じような状さまして、おなじように、揃そろつて一尺ほどずつ、砂の中か
ら鎌首かまのくぼを擡もたげて、一斉に空を仰いだのであつた。その畝うねる時、齒
か、鱗うろこか、コツ、コツ、コツ、カタカタカタと鳴つて響いた。――

—洪水に巻かれて落ちつつ、はじめてやわらか柔い地を知つて、砂を穿うがつて活いきたのであろう。

きやツ、と云うと、島が真まんなか中から裂けたように、二人の身体からだは、浜へも返さず、浪打際なみうちぎわをただ礫つぶてのように左右へ飛んで、裸は身だかで逃げた。

大正十五（一九二六）年一月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集 第二十三卷」岩波書店

1942（昭和17）年6月22日第1刷発行

初出：「文藝春秋 第四年第一號」

1926（大正15）年1月

入力：本山智子

校正：門田裕志

2001年6月25日公開

2012年9月14日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

絵本の春

泉鏡花

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>